大木権現山古墳群

昭和54年3月

島根県八束郡東出雲町教育委員会

序

この報告は、島根県八束郡東出雲町大字出雲郷大木所在の古墳群を東出雲町教育委員会が、昭和53年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。

本古墳群は、国道9号線沿いに存在し、近年の開発ブームにのった宅地造成工事等により消滅する可能性も考えられた。そこで当教育委員会が昭和53年5月23日から同年9月22日までの4ヶ月にわたり発掘調査を実施したのである。

当教育委員会としては、このような長期間の発掘調査は、初めての経験であり、不備な点も多々あると思うが、本報告を通じて多少なりとも埋蔵文化財に対する理解と関心が高まれば幸に思う。

なお、本書を発行するにあたり、長期間御尽力をいただいた島根県教育委員会、島根県立八雲立つ風土記丘資料館並びに地元関係各位に衷心より厚く御礼申し上げます。

昭和54年3月

島根県八束郡東出雲町教育委員会
教育長　宮　廻　勝　重

例　　言

1. 本書は、東出雲町教育委員会が国庫と県費の補助を受けて、昭和53年度に実施した大木権現山古墳群の調査報告である。
2. 本調査にあたっては、地元の方々、松江北高等学校考古学部、松江南高等学校生徒有志による協力と下記の方々の指導と協力を得た。記して謝意を表する。

・調査指導

山本　清（島根大学名誉教授）

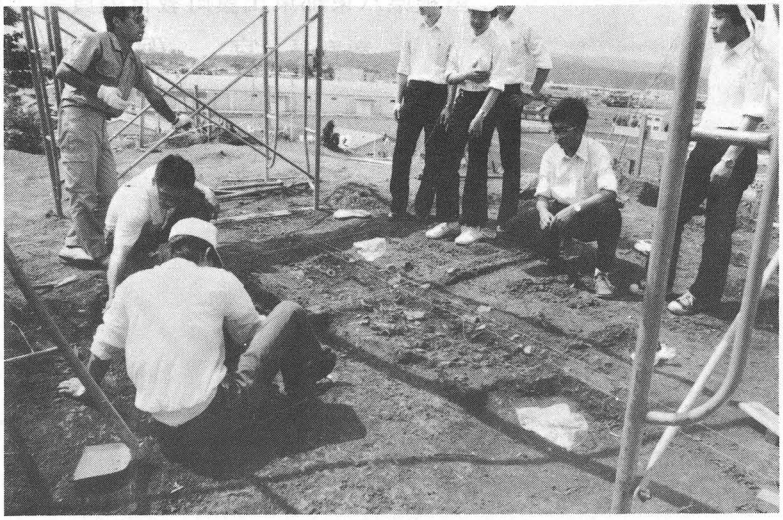
渡辺　貞幸（島根大学法文学部講師）

・協力調査員

勝部理恵子（島根県埋蔵文化財調査員）

花谷　浩（京都大学学生）

3. 調査は、島根県八東郡東出雲町教育委員会係長高倉正、島根県教育庁文化課文化財保護主事勝部昭、同主事石井悠、横山純夫、宮沢明久、松本岩雄、同嘱託三宅博士、西尾克己、平野芳英が担当して実施した。本書の編集は石井が行なった。従って、内容に誤りがあるとすれば、全て石井の責任である。
4. 本書に掲載した地図は建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行50,000分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭54中複第2号
5. 表紙の題字は東出雲町長門脇朝吉氏による。



発掘調査風景

目　次

Ⅰ　大木権現山古墳群をとりまく周囲の遺跡 …… 4

Ⅱ　古墳群の概要 …… 6

Ⅲ　調査の概要 …… 7

1.　1　号　墳 …… 8

2.　2　号　墳 …… 17

3.　3　号　墳 …… 22

4.　4　号　墳 …… 24

5.　5　号　墳 …… 28

Ⅳ　おわりに …… 30

見学会風景

Ⅰ　大木権現山古墳群をとりまく周囲の遺跡

本古墳群は東出雲町出雲郷字大木１７５５の1、１７５６の1、１７６５番地の続きの３筆の山地にあって、意宇平野の東側に突出した低丘陸上に存在する。きわめて、眺望のきく場所で、西側は出雲国庁の置かれた意宇平野が広がり、北側は中海を通して島根半島をみることができる。さらに東側はるか遠くに霊峰大山の雄姿を遥拝することができるのが印象的である。

付近一帯は埋蔵文化財の宝庫ともいえるところで、縄文時代以降の各種遺跡が集中している。とりわけ古墳群、横穴群の密集地帯である。そのうち、東出雲町内のものを中心に代表的な遺跡を簡単に紹介しておこう。

出雲郷春日遺跡（図１－９）

かなり広範囲に及ぶものと言える。弥生時代以降の遺物散布地であり、その性格は不明であるが、弥生式土器片、須恵器片、鏡片等が出土している。

的場土坑墓（図１－６）

発掘調査の結果、自然丘の地山を削り出し、約１ｍの盛土を施した方墳が確認されている。方墳の内部構造等については確認されていないが、方墳の下部に土坑墓が検出された。土坑墓は古墳中央部よりやや北側に寄った部分に掘られ、その西側に1.5ｍ離れて南北方向に石列が認められた。墓坑は長軸をほぼ東西方向に置かれ、上縁で長さ2.6ｍ、幅２～1.7ｍ、深さ1.2～1.1ｍで東側の幅が広く、深くなっている。遺物は土坑上部に供献用の土器群が認められ、鍵尾Ⅰ式に比定される。[註①]

古城山古墳（図１－１４）

封土がかなり流されていたため、もとの墳丘を確認することは困難であるが、発掘調査の結果では、一辺約２０ｍの方墳を意図して構築されたと考えられる。主体部は割竹形木棺を埋葬したと考えられる墓坑が検出された。出土遺物は、鍵尾Ⅱ式に比定される鼓形器台と「位至三公」の銘を有する舶載鏡がある。[註②]

春日山岩船古墳

墳形は不明であるが、地山をある程度整えられたものであろう。主体部は舟形石棺をかたどったものであるが、通例のものと異なり、地山の底からのぞいた凝灰岩の露頭を加工してそのまま棺としたものである。[註③]

焼田（やけんだ）古墳群（図１－２２）

最低８基の古墳で構成されている。大半は破壊され、箱式石棺が露出しているものもある。出土した須恵器は山陰の須恵器Ⅲ期に属するものである。

栗坪１号墳（図１－１１）

墳丘の北側を削って切り離し、石室のある南側に土を盛って築いた一辺約１４ *m* の方墳で、切石を用いた妻入りの石棺式石室を有する。既に盗掘を受けたもので、石室内部に板状石が存在しているが、本来は石棺が置かれていたものと考えられる。

安部谷横穴群（図１－７）

凝灰岩に穿たれた横穴群で、かなり規模の大きいものである。全体の横穴群はいくらかの単位群にわかれて構成されている。そのうち第１群は５穴近接して一列に並び開口している顕著な横穴群であって、その形式が整美であることから国の史跡に指定されている。[註④]

図１　周辺の遺跡分布図

（国土地現院承認番号）昭和５４中複第２号

1.大木権現山古墳群　2.中竹矢古墳・社日古墳　3.出雲国分寺跡　4.出雲国分尼寺跡
5.迎接寺古墳群　6.的場土坑墓　7.安部谷横穴群　8.布敷遺跡　9.春日遺跡
10.姫津古墳群、姫津横穴群　11.栗坪古墳群　12.阿太加夜神社境内遺跡　13.古城山横穴群
14.古城山古墳　15.後谷池横穴群　16.安垣古墳群　17.渋山池古墳群　18.四廻横穴群　19.中津横穴群
20.長池上古墳群　21.榎迫古墳群、油免古墳群　22.焼田古墳群

Ⅱ　古墳群の概要

本古墳群は丘陵のほぼ尾根筋にあたる部分（標高１４～１９ *m*）に築かれている。発掘調査開始前の分布調査では４基の方墳が確認されていたが、調査が進むに及んで５基の方墳が確認された。各古墳の番号は丘陵の東端に存在するものを１号墳、古墳群の南端にあるものを２号墳、２号墳の北側のものを３号墳、３号墳の西側のものを４号墳、３号墳と１号墳の中間に存在するものを５号墳とした。なお、この番号は調査を行なった順に付したものである。本丘陵は柿畑、茶畑として利用されたり、町の水道管敷設により、かなり元の形を損ねられていたが、古墳の形はおおよそ残されているものと考えられた。

丘陵全体をみると、北側と西側が極端な崖となっている。本来、北側と西側は若干延長した部分まで丘陵があったとも想像される。そうであるとすれば、古墳の数も現在のものより多かったとも考えられる。

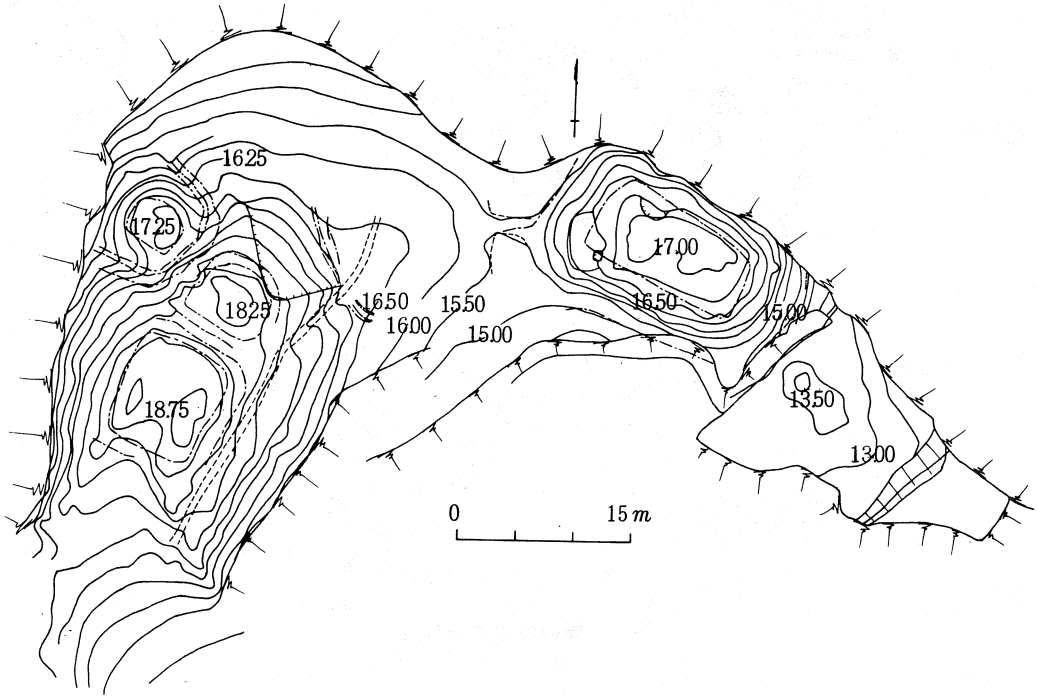


図２　古墳群地形測量図

Ⅲ　調　査　の　概　要

発掘調査は昭和５３年５月２３日～９月２２日の４ケ月間を費して実施した。樹木密生地であるため抜根に手間どり、しかも炎天下であり作業員の不足に悩まされたが、後半において松江北高等学校考古学部、松江南高等学校生徒有志による助力を得て、調査を完了した。

調査は丘陵全体の地形測量から開始した。地形測量は丘陵全体に一辺５ *m* の方眼を組み、５０ *cm* 間隔（墳丘部分は２５ *cm*）の等高線で表現した。等高線の基準は国道９号線沿いの水準点を利用した。

墳丘の発掘は四分法で実施し、５基の古墳を掘り進んだ結果、丘陵全面の発掘を行なった形となった。５号墳の場合、表面的な観察では古墳の存在を認めることができなかったが、４基の古墳を発掘しているうちにその一角を検出したのである。調査はでき得るかぎり全面発掘に近い形で行なわれているべきであると痛感させられた。

発掘調査の結果明らかになったことを、以下各古墳毎に記すことにする。

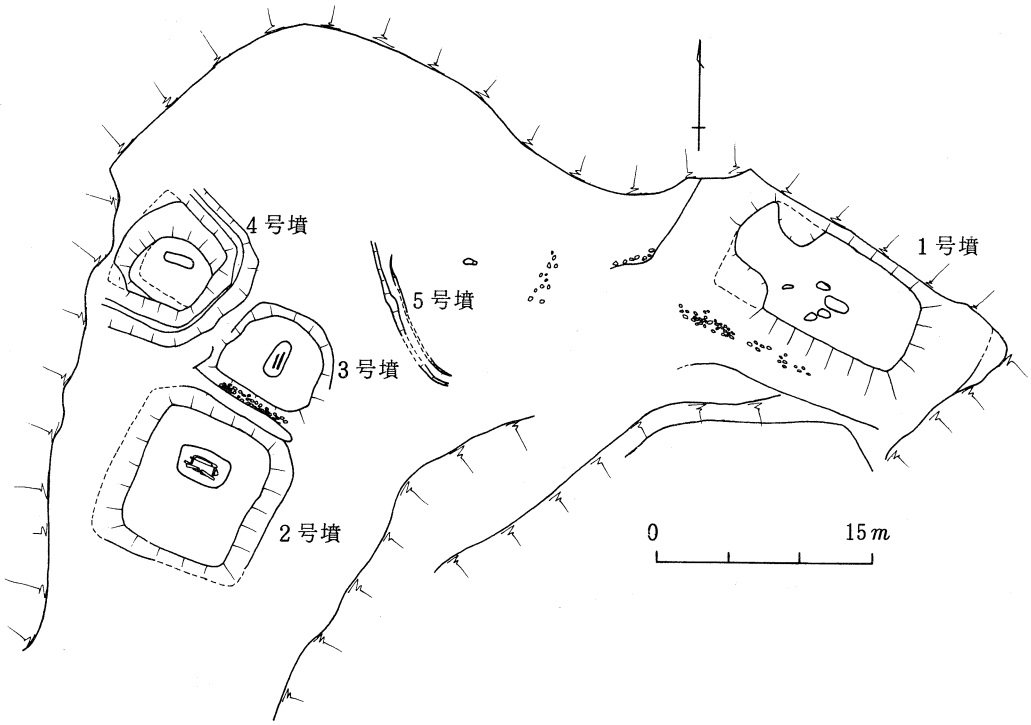


図3　墳丘配置図

1、1　号　墳

a、墳　　丘

丘陵の東端に位置する。つい近年まで、墳頂部には荒神が祀られ、墳丘の東側は後世削平された痕跡があり、そこには神社が存在していたという。現在、荒神は丘陵東麓に移され、神社は阿太加夜神社に合祀されている。墳丘の北側は崖となっており、墳丘の西側半分は柿畑、茶畑として利用されたため、元の形をかなり損っている。墳丘の規模はこうした事実により正確なところは把握できないが、おおよそ次のとおりである。東西２３.０８*m*、南北１２.２*m*、高さ2.３５*m*（南北については、若干延長した長さを考えるべきであろう）の方墳である。墳丘の南側と西側の斜面及び裾部から葺石状の石が認められた。石は転落したものが多く、整然と並ぶものは少ないが、墳丘の西南隅は突出する形で石列が検出されたところから、四隅突出形方墳ではないかとも考えられたが、確証を得るに至らなかった。（図４）今後の類例をまちたい。

墳丘の築造方法は、南側３分の１を盛土で築き、北側は地山を切削加したものである。周溝、段その他の施設は認められなかった。なお盛土中から弥生時代後期の土器片が検出されていることから、墳丘築造以前に住居等が営なまれていたと考えられる。さらに墳丘築造後も墓地あるいはそれ以外の目的で使用されたらしく、須恵器、須恵質土器、陶器、土師質土器、古銭、砥石等が検出された。

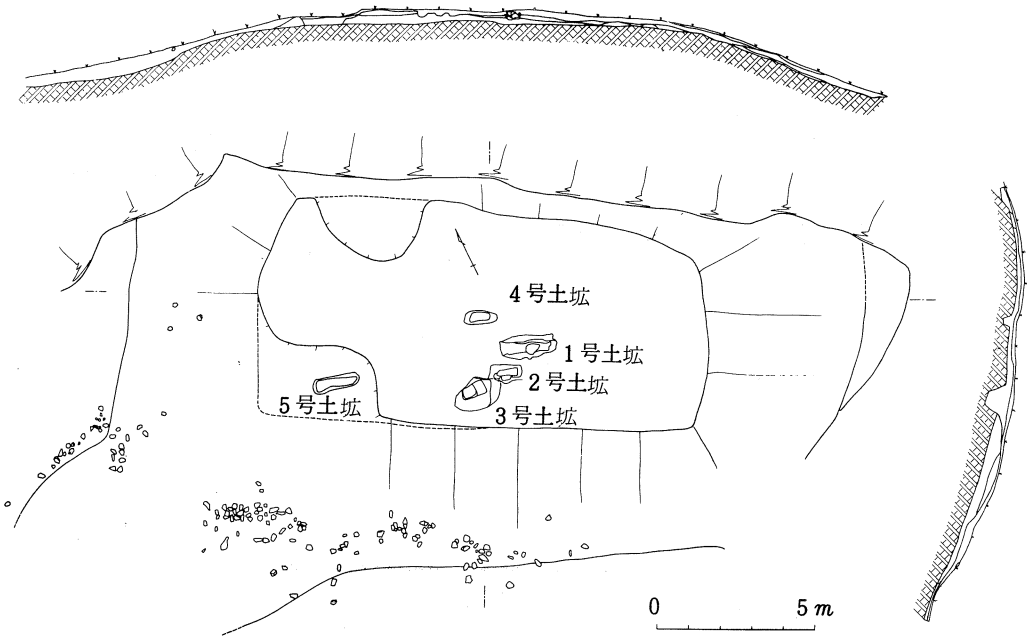


図４　１号墳墳丘実測図

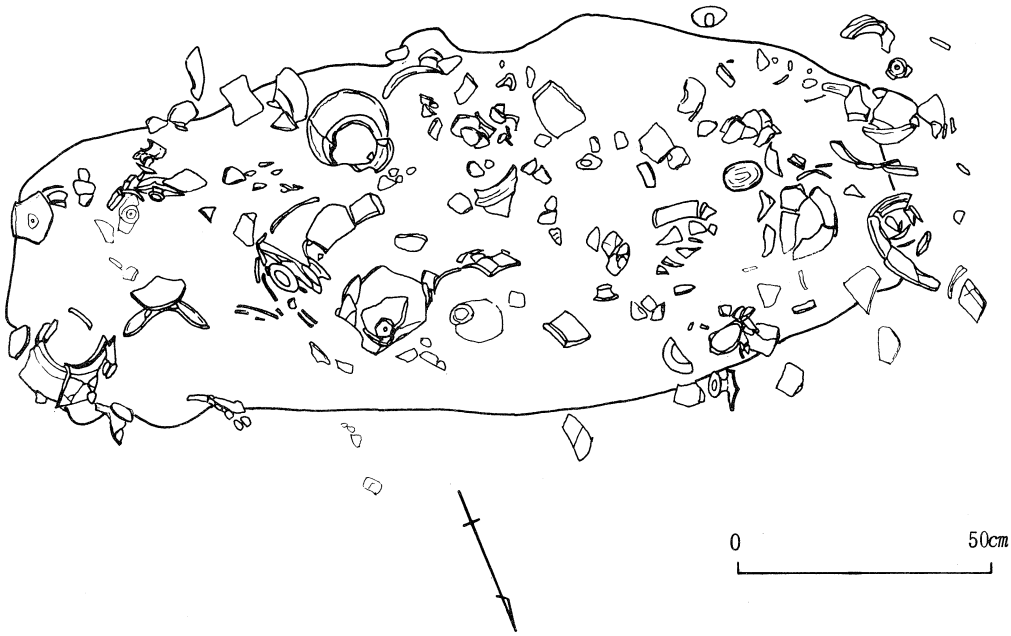


図５　１号土坑遺物出土状況

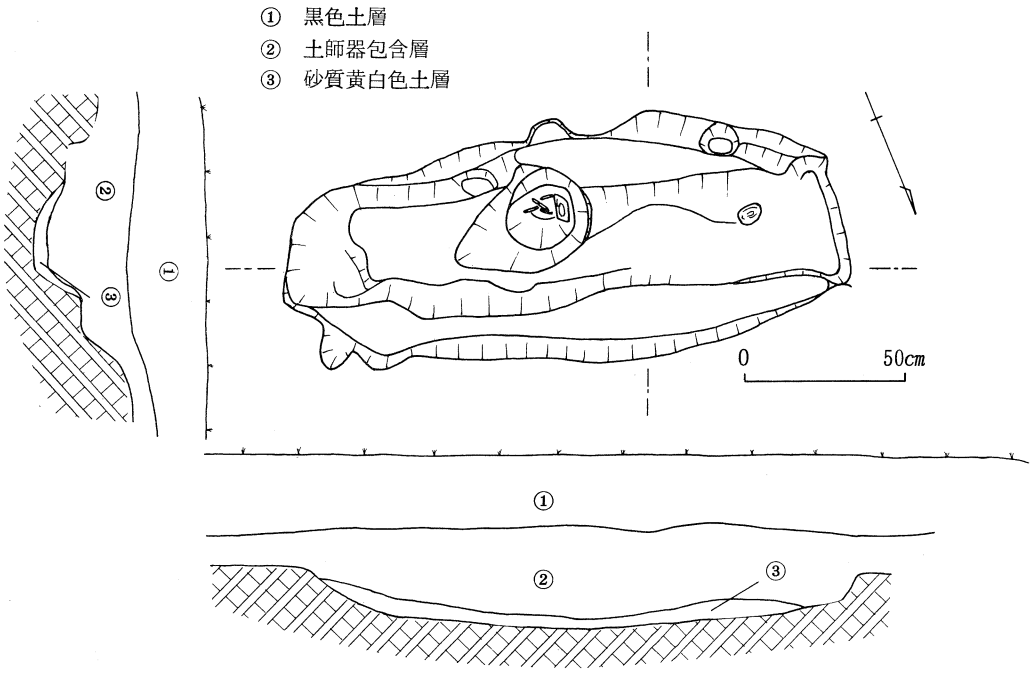


図６　１号土坑実測図

b、主　体　部

墳頂部の5ヶ所で土坑を検出した。1、2号土坑は遺物を伴なうものであるが、3、4、5号土坑では遺物を検出し得なかった。以下、各土坑について略述する。

1号土坑

東西に長いもので、西側に頭を置き、足ははるか遠くの大山に向けるものである。長さ1.74m、幅0.6m、深さ0.2mのもので土坑内両側面にはテラス状の平担面があり、土坑の中心よりやや東側に寄った部分の南壁に近いところでピットが検出され、その内部から土器片と石が検出された。（図6）

この土坑は、表土下数センチメートルの部分から土師器片が相当量検出され、発掘が進むに及んで、大量の土器片がぎっしりとつまっていることが判明した。（図5）土坑底部に近くなると、完形に近いものも検出されたが、大半は細片となっている。また土坑西端近くで、こぶし大の卵形河原石も検出された。この河原石は、前述の的場土坑墓でみられたものと同類のものである。土坑の最下部は砂質黄白色土である。

2号土坑

1号土坑の南側に並ぶものである。3号土坑を穿つ際、一部切りあったものでその正確な形状を知ることはできないが、長さ0.96m、幅0.46m、深さ0.3mのものである。内部に1号土坑で検出した土器と同類の土師器片を検出していることから、1号土坑より遅れた時期に穿たれた墓坑と考えられる。

3号土坑

2号土坑と切りあうものである。上縁は卵形に近い不整形を呈し、底部は長方形である。長さ1.5m、幅1m、深さ0.6mの規模を有する。土坑上から甕形の須恵質土器片が検出されたが、この土坑に伴なうものと即断はできない。切りあいの状況から、2号土坑より新しい時期に穿たれた墓坑であろう。

4号土坑

1号土坑の北側に位置し、長さ1m、幅0.4m、深さ0.35mの規模を有する。出土遺物がなく、その穿たれた時期及び性格は不明である。

5号土坑

墳丘上面の西南部に位置する。後世の耕作で、既に削平された部分であるため、土坑としてとりあげてよいか判断に苦しむところである。長さ1.45m、幅0.4m、深さ0.1mの規模で穿たれた時期及び性格は不明である。

c、出土遺物

1号土坑で検出された遺物は、土師器甕、器台、低脚坏、高坏であった。以下器種毎に略述しよう。

甕形土器

いずれも小破片であるが、複合口縁を有するもので、やや細かくみると、次のように分けられる。

① 口縁下端があまり外方に突出しないもの（図7－1～3）

口縁部の立ちあがり部分がやや湾曲する傾向もみられる。口縁部は内外とも横なでにより仕上げられ、肩部外面に刷毛目をとどめるもの（図7－2・3）もあり、胴部内面はヘラ削りで仕上げられている。このタイプのものは、胎土にあまり砂粒を含まない。

② 口縁下端部が外方に突出するもの（図7－4～10）

口縁下端がやや外方に突出するもの（図7－4・5）と、するどく突出するもの（図7－6～10）がある。また口縁の立ちあがり部分はほぼ直線状を呈し、やや外方に傾斜する。口縁部は内外とも横なでにより仕上げられ、肩部、胴部外面に刷毛目をとどめるものもある。（図7－5・7）胴部内面は全てヘラ削りで仕上げられている。このタイプのものは大粒の砂粒を含むものが多い。

器台形土器

全体に小破片が多いが、かなり器形を復元できるものも含まれる。全体に筒部の短い鼓形器台で器高から次のように分けられる。

① 器高の高いもの（図7－13・14、図8－1～3）

完全に復元できるものがないため、適格な数字を挙げることは困難であるが、推定器高19㎝のものである。全体の外面は横なでにより仕上げられ、受部内面はヘラ磨き、脚台部内面はヘラ削りが施され下端部は横なでにより仕上げられている。胎土は若干の細砂を含むが、緻密である。

② 器高が中間的な高さのもの（図8－4～14 図9－1～5）

推定平均器高10㎝のものである。全体の外面は横なでにより仕上げられ、受部内面はヘラ磨き、脚台部内面はヘラ削りが施され、下端部は横なでにより仕上げられている。なおこのヘラ削り部分もていねいに行なわれている。（図8－11・13）筒部上端で継ぎ目のみえるものもある。（図8－8・11・13）胎土は細砂を含むものも多いが、緻密である。

③ 器高の低いもの（図9－6～8）

推定平均器高9㎝のものである。全体の外面は横なでにより仕上げられ、受部

内面はヘラ磨き、脚台部内面はヘラ削りが施され、下端部は横なでにより仕上げられている。筒部上端で継ぎ目のみえるものもある。（図９－７）全体に胎土は細砂を含むものも多いが、緻密である。

低　脚　坏

出土したもののうち最も目立ったものであるが、いずれも細片となっており、復元できたものを以下紹介しよう。器形から次のように分けることができる。

①　器高が低く、坏部があまり発達しないもの（図９－１０～１３）

器高は4.5㎝～５㎝（脚部の高さ1.5㎝～1.7㎝）で、坏部の径１1.3㎝～１3.2㎝のものである。図９－１０は風化のため不明であるが、全体に坏部外面は口縁部の横なでを除いてこまかい刷毛目が全面にみられる。坏部内面は全てヘラ磨きで仕上げられている。図９－１１は内面に若干刷毛目が認められる。刷毛調整後にヘラ磨きを行なったのであろう。脚部は内外面とも横なでにより仕上げられている。図９－１０は坏部と脚部の継ぎ目が明瞭である。

②　器高がやや高く、坏部が発達するもの（図９－１４・１５）

図９－１４は器高7.5㎝（脚部の高さ２㎝）、坏部の径１9.8㎝のもので、坏部内外面ともヘラ磨きで仕上げられ、外面の上部は横方向のヘラ磨き、下部は縦方向のヘラ磨きにより仕上げられている。脚部は内外とも横なでにより仕上げられている。胎土は緻密である。

図９－１５は口縁部を欠くため正確なところは不明であるが、図９－１４より坏部が発達するものである。坏部は内外面ともヘラ磨きで仕上げられ、外面は部分的に刷毛目が認められる。脚部は内外とも横なでにより仕上げられている。

③　坏部が椀の形をしているもの（図９－１６）

器高5.8㎝（脚部の高さ1.3㎝）、坏部の径１3.4㎝のもので、高台付椀と称した方が良いような器形である。坏部内外面とも口縁部の横なでを除いて、刷毛調整後ヘラ磨きで仕上げられている。脚部は内外面とも横なでにより仕上げられている。胎土は緻密である。

高　　坏

出土遺物全体からみた高坏の量は極めて少ない。ほとんどが組片である。図９－１８は、脚部の径が１７㎝、くびれ部までの高さが、１０㎝ある。外面は縁端部のなで部分を除いて、刷毛による仕上げ、内面はヘラ削りで仕上げられている。

以上簡単に１号土坑出土のものを大雑把に分類して紹介したが、１号土坑の遺物は出土状況から一括遺物と判断される。[註⑤] 従って、これらの形式差は同時期における多様性としとらえることができる。小谷式土器並行のものと考えられる。

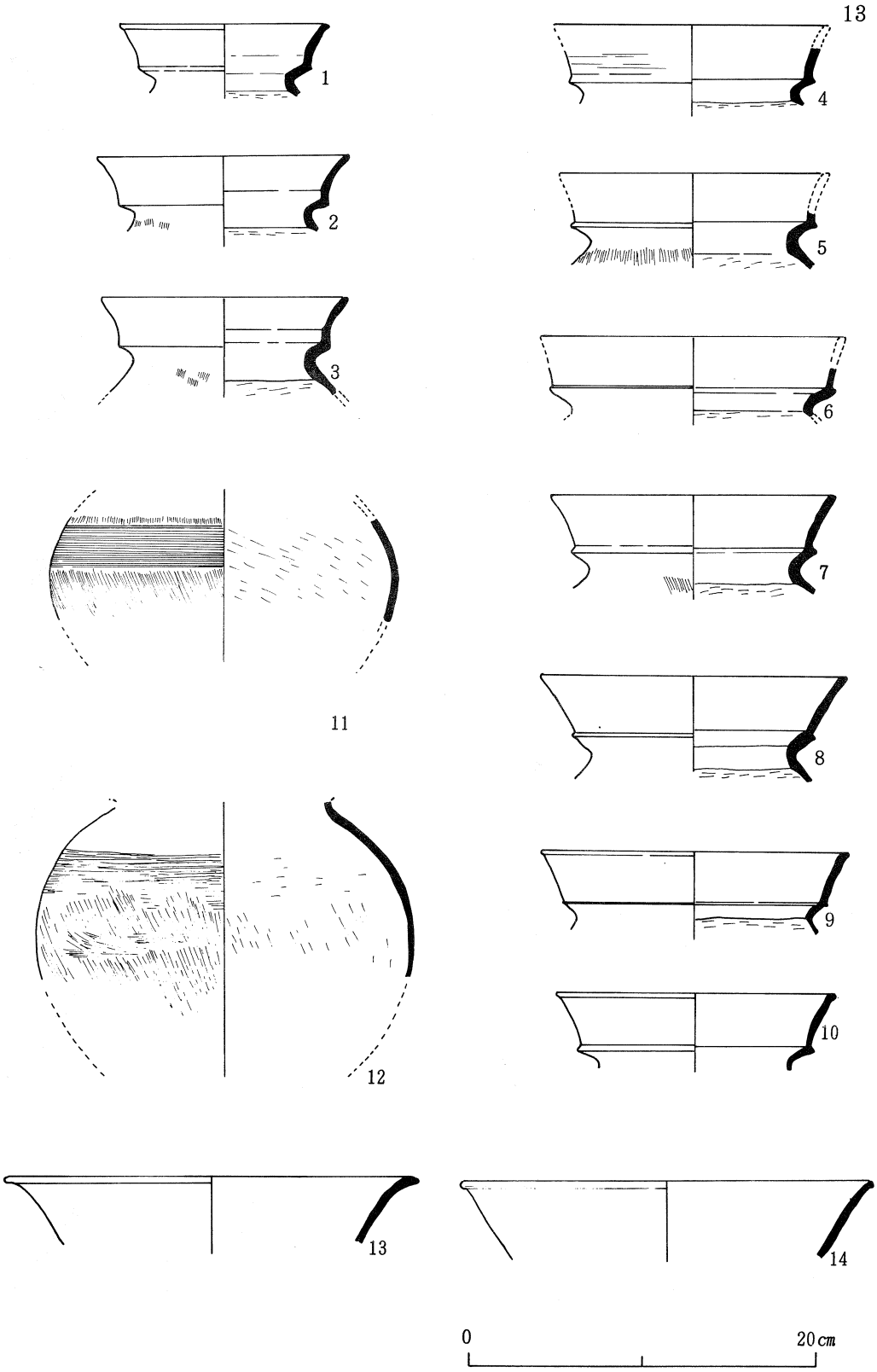


図7　出土遺物実測図

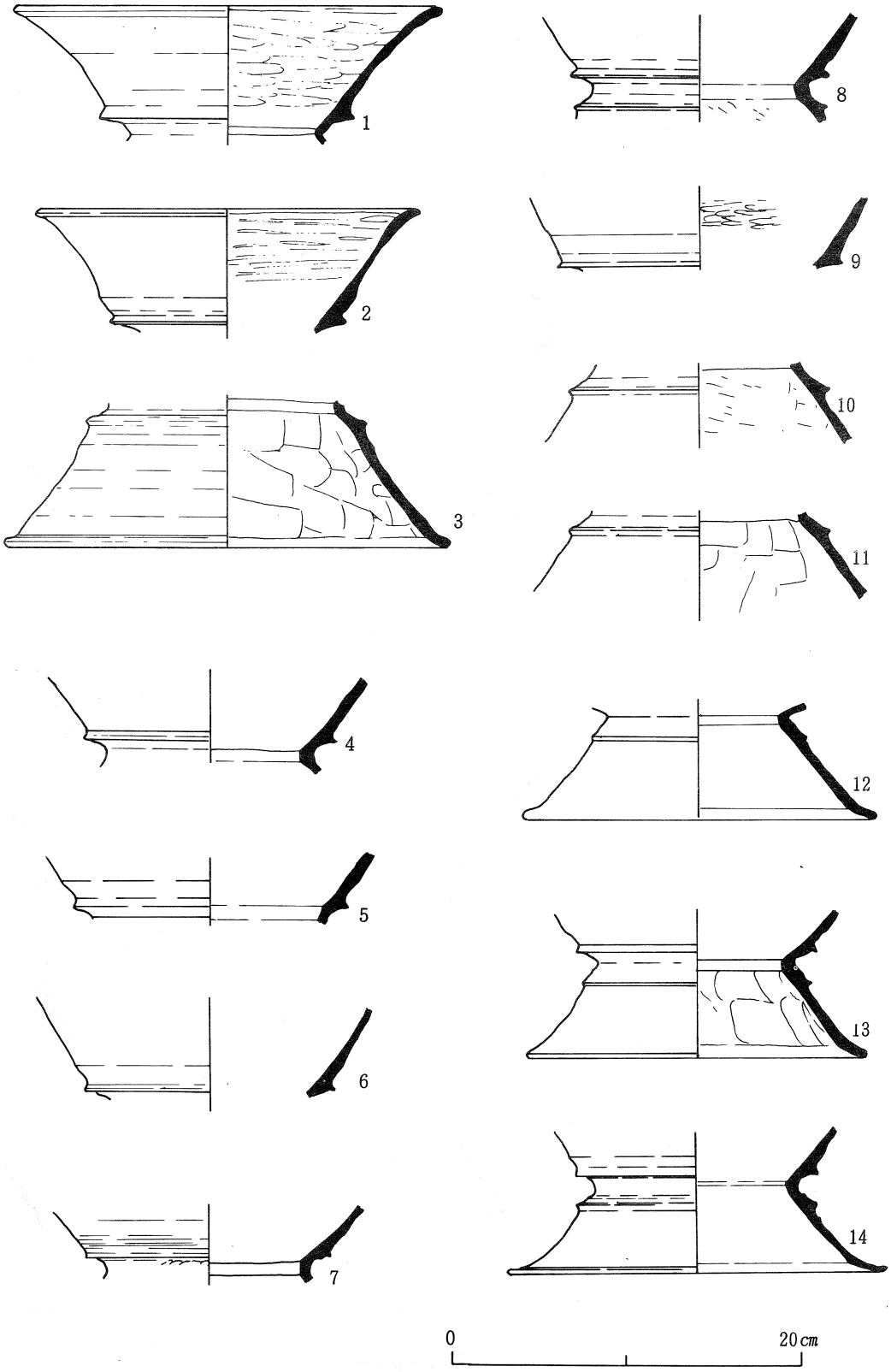


図８　出土遺物実測図

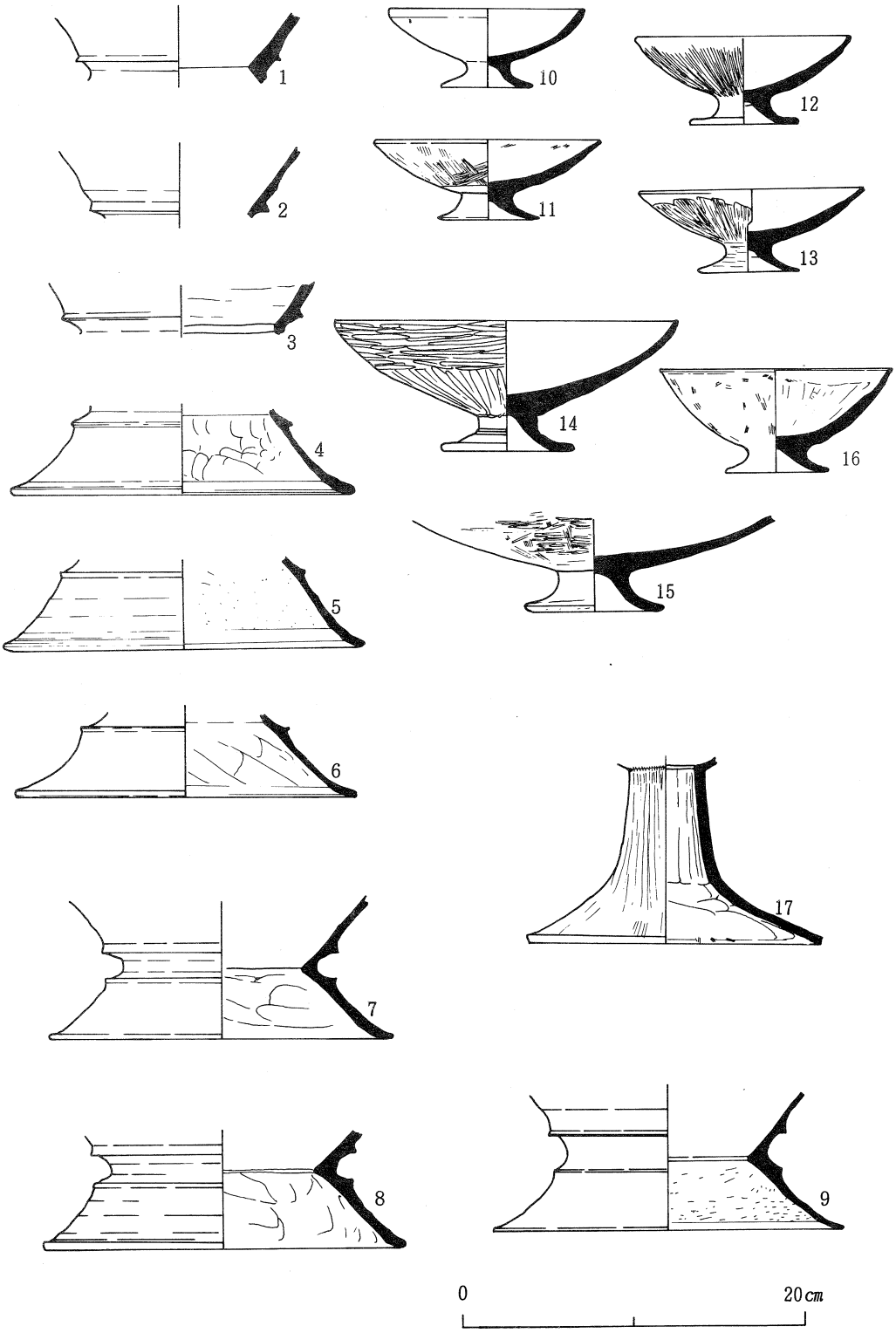


図９　出土遺物実測図

d、ま　と　め

前述のとおり、正確な墳形及び規模を確認することはできなかったが、墳丘の南側3分の1は盛土により、北側は地山を切削加工して築かれた方墳と考えられた。墳丘の裾部には葺石の痕跡が認められ、墳頂部には5ケ所で土坑が検出されたことも前述したとおりである。墳丘築造時に穿たれたと考えられる土坑は1号土坑のみであり、1号土坑から検出された遺物から古墳時代前期に築造されたものと考えられる。1号土坑は、土坑内両側にテラス状の平担面を有することから、遺体安置後に蓋板を置き土を被せ、その上に土器を供献したと考えられる。長い年月の間に蓋板が腐り陥没したのであろう。土坑内の断面をみると、土器のぎっしりつまった層と砂質黄白色土層に分けられることもその傍証となり得よう。

前述した的場土坑墓、古城山古墳及び来美古墳さらに後述する大木5号墳等が本古墳群周辺地域では最も早い時期に築造された古墳時代の埋葬施設と言えよう。これらの前期古墳のなかで、大木1号墳の占める位置について語ることはできないが、次のような点が指摘される。比較的規模が大きいこと、四隅突出形方墳としての可能性があること。多量の土器が検出されたこと、墳丘の築かれた場所が極めて眺望のきく所であること等から、古墳時代前期の当地方における相当な有力者が葬られた古墳と考えられる。とりわけ中海に面した位置に築かれたことを考えると、交通・軍事的な面で多大な影響力を持った人物が葬られたのであろう。

2、2 号 墳

a、墳　　丘

古墳群の最南端に位置する。墳丘の南側は封土が流失し、地山が露出しているため墳丘のほとんどが消失しているものと考えられたが、発掘の結果、中心部はやや北寄りのもので東西11.6 m、南北11.8 m、高さ0.9 mの規模をもつ方墳であることが判明した。

墳丘は地山を切削加工し、石棺を安置した後に盛土したものである。

墳丘の北側には幅2.6 mの溝が3号墳と共有する形で存在していた。葺石は認められなかったが、埴輪片を検出している。

なお、盛土中から黒曜石片、黒曜石製の石鏃が検出され、墓坑南側には縄文時代晩期の土器片を含むピットが検出された。古墳築造以前に縄文時代の住居等が営なまれていたと考えられる。

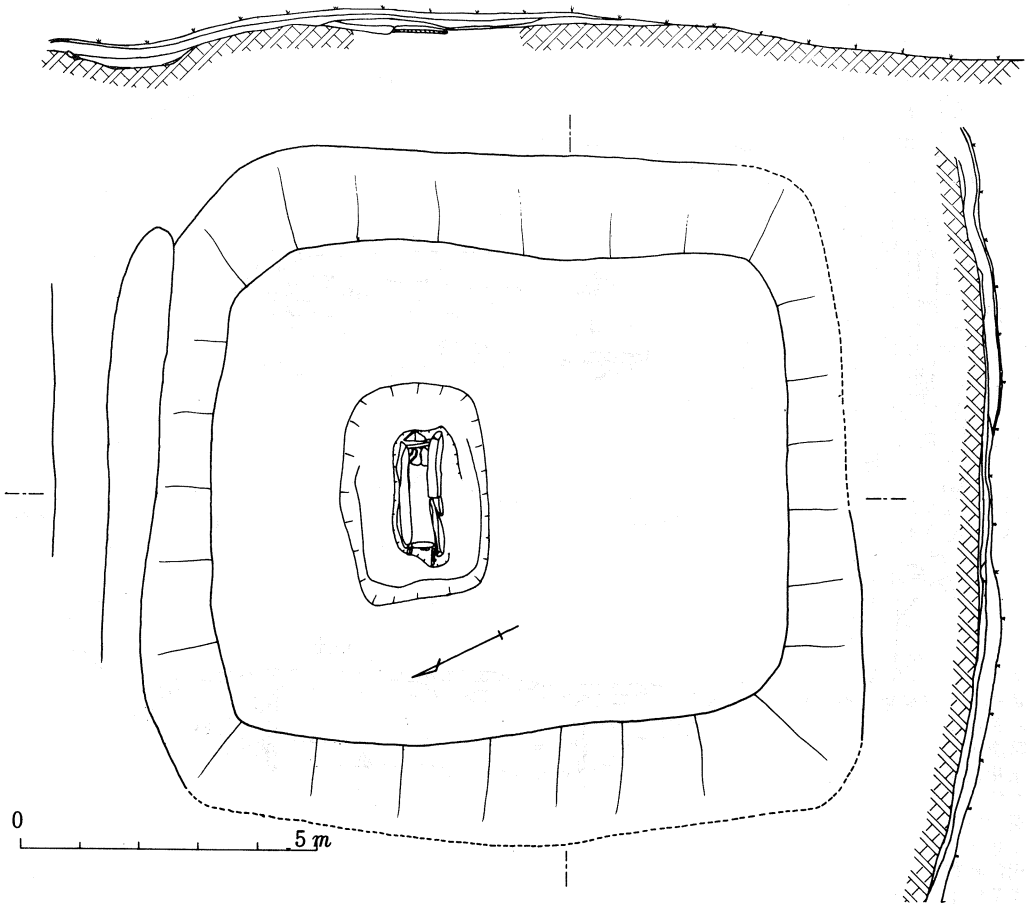


図10　2号墳墳丘実測図

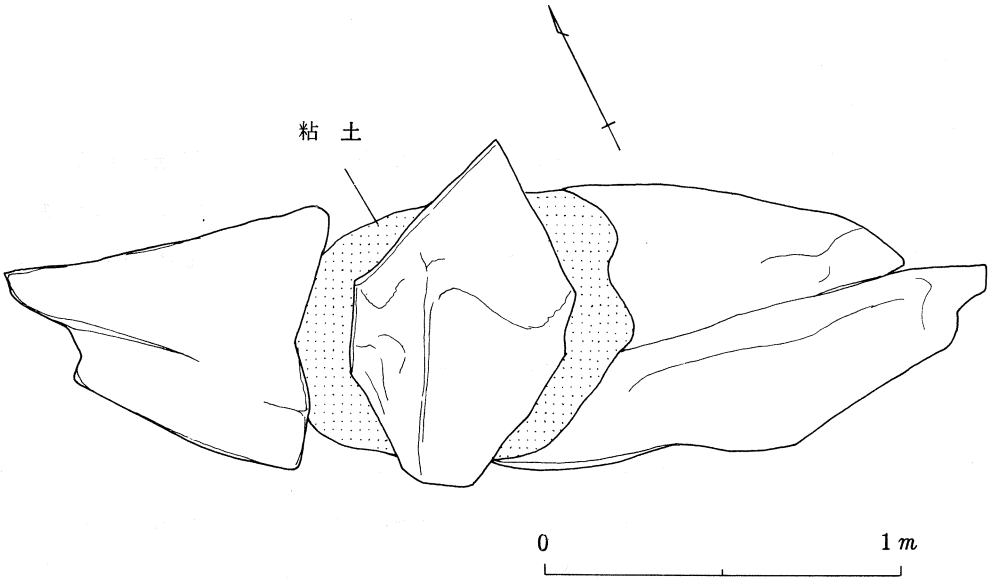
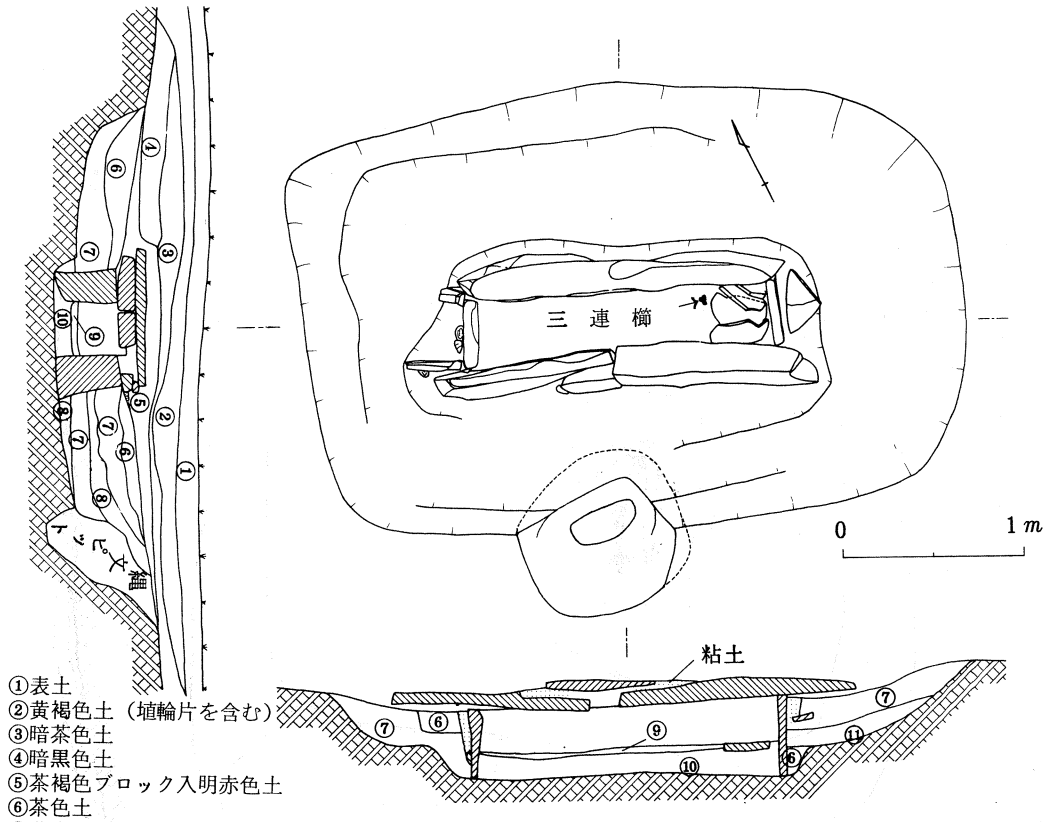


図11　石棺蓋実測図



①表土
②黄褐色土（埴輪片を含む）
③暗茶色土
④暗黒色土
⑤茶褐色ブロック入明赤色土
⑥茶色土
⑦黄赤色土
⑧茶色土
⑨褐色砂質土
⑩赤黄色土
⑪赤色土

図12　石 棺 実 測 図

b、主　体　部

墳頂部のやや北寄りの場所に長さ3.56m、幅2.58m、深さ0.5mの東西に長い隅丸方形の平面を有する墓坑を地山に穿ち、その内部に箱式石棺を安置するものであった。なお、墓坑は前述した縄文時代晩期の土坑の一部を切っているものである。石棺は比較的大型の石材[註⑥]を用い、内法で長さ1.52m、幅0.31～0.37m、深さ0.4mの規模を有するものである。石棺内部の東端には板状石による枕がすえつけられている。この枕は側面に3枚の板状石をたてかけ、あたかも顔をかくす形となっている。鳥取県の長瀬高浜遺跡では箱式石棺の内部から土師器高坏3個で頭部を覆うようにした枕が検出された。[註⑦]この長瀬高浜例に似ていると言えよう。石棺は実測図（図12）に示すように、当地方では他に類例のないタイプである。石棺東部外側には1枚の板状石を置き、西部外側には2枚の板状石を側壁に沿って立てている。上からみると、石棺そのものが、あたかも東に頭を向けて寝た人物のようである。

石棺の組みたて方は、墓坑の掘り方からみると次のような手順で行なっていることが判明した。①北側側壁を設置する。②東西両小口部分の石材を設置する。③南側側壁を設置する。④東西両端の板状石を設置する。⑤継ぎ目に粘土で目張りをする。⑥蓋石を載せる。⑦蓋石の継ぎ目に粘土で目張りをする。以上述べた手順は遺体埋葬にかかる作業を除いたものであって、実際にはこの間に色々なことが行なわれたであろう。

墓坑内底部の石棺周囲から、石棺と同質の石材片と木炭片が検出された。埋葬に伴う祭祀が行なわれた痕跡とも考えられる。

c、出土遺物

埴　　輪

墓坑上の盛土内（黄褐土層）に埴輪片が敷きつめられた状態で検出された。（図12、図13）

検出された埴輪は形象埴輪片と円筒埴輪片である。形象埴輪片は家形埴輪の一部分と考えられるもので、なかに網代文様が施されたものもある。円筒埴輪片も出土量が少なく、全体を推定することはできないが、基底部外径19cm、タガ直下径23cmと推定される。外面は上部で刷毛仕上げ、基底部でヘラ削りにより仕上げられている。内面は指頭による圧痕がみえる。

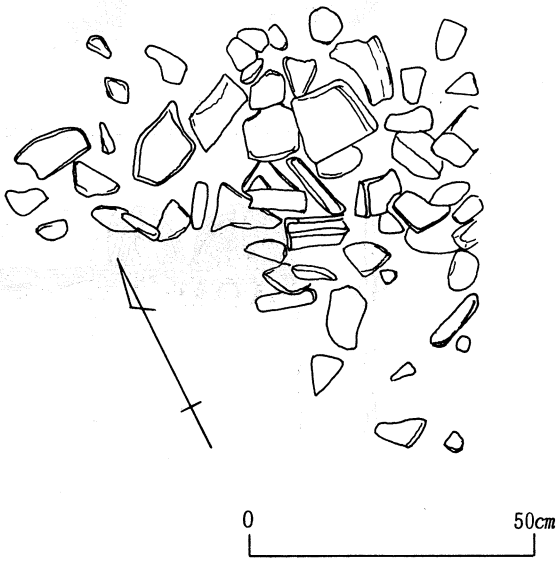
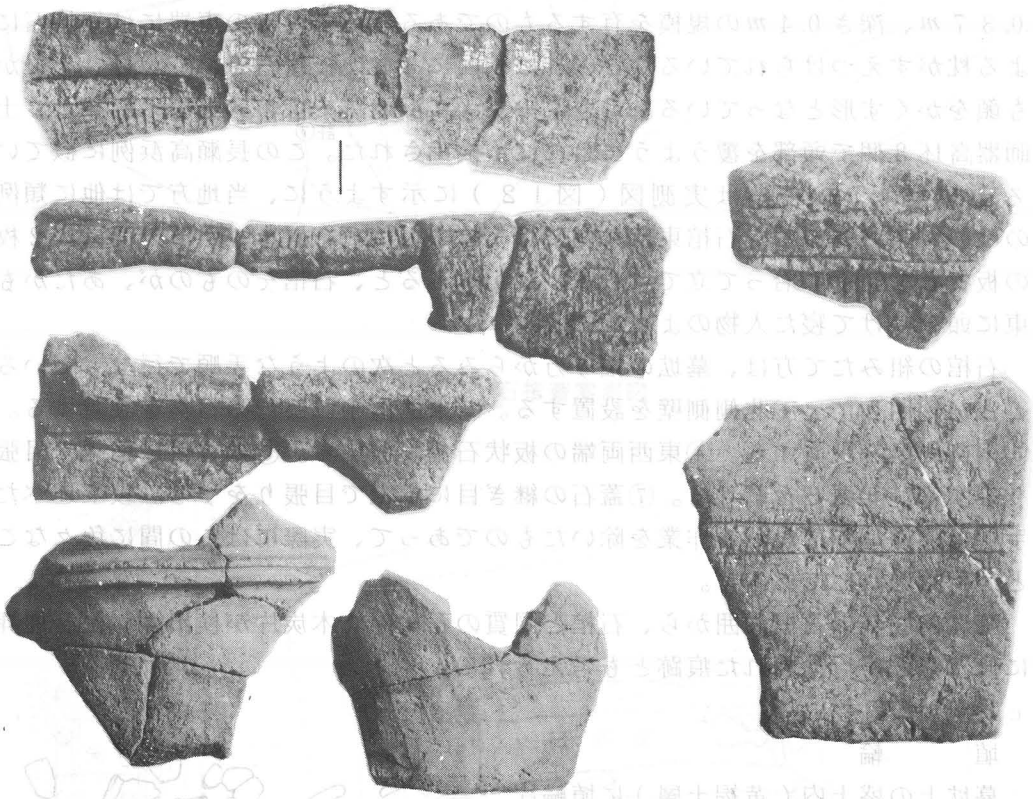


図13　埴輪出土状況

三　連　櫛

石棺内部で検出された。ちょうど、遺体の肩にあたる部分で認められた。竹を細かく割ってU字状にたばねたもの（幅 1.3 cm）3個を繊維でつないだものである。表面には黒漆がかけてある。（図12、図14－1・2）本古墳で検出した三連櫛は当地方では他に類例をみない。



図版1　形象と埴輪と円筒埴輪片土

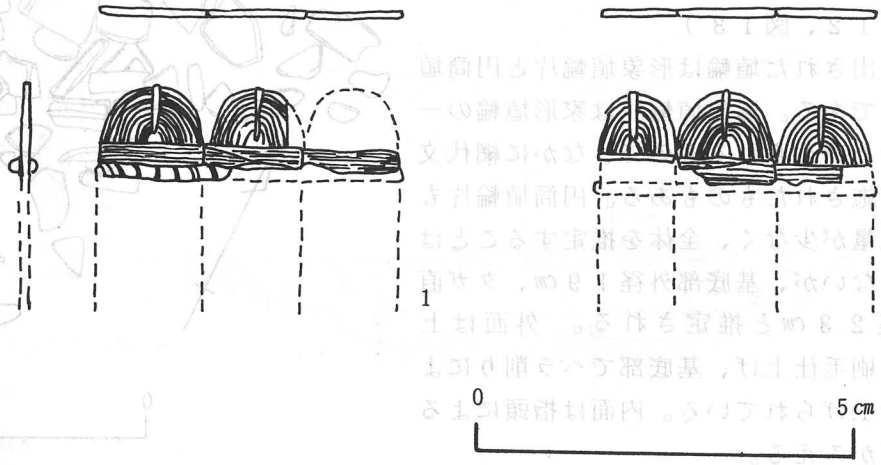


図14　三連櫛実測図

d、ま　と　め

前述のように、地山を切削加工して１１.８ *m*×１１.６ *m*の方墳を築き、墳頂部には土坑を穿ち、立派な箱式石棺を置いたものであることが判明した。この石棺は大形でかなり入念につくられ、 特異な形を呈し、当地方では初見のものであった。全体に出土遺物が少ないが、墓坑上の埴輪片、棺内の三連櫛が目につく。埴輪は、墳丘裾部からも破片が点在した状態で検出されたが、本来墓坑上にあったものが、後世の耕作等にあって流れたものと考えられる。本古墳の埴輪の出土状況は八雲村勝負谷１号墳の例[註⑧]に似ていることが指摘される。勝負谷１号墳の報告では、「墓域を画するという大規模古墳にみられる円筒埴輪の用い方と異なった、小規模古墳における特殊な葬送儀礼のあり方を示しているものといえよう」としている。本古墳の場合も勝負谷１号墳と同様な解釈をとりたい。棺内出土の三連櫛も前述したように当地方では初見のものであるが、出土状況は前述の鳥取県長瀬高浜遺跡の場合と似ている。長瀬高浜遺跡では、棺内の男性人骨の頭部に小形の櫛が置かれていた。本古墳の櫛は右肩部から出土していることが若干異なる点である。棺内に櫛を入れることの意味を容易につかむことはできないが、魔除け的な意味をもたせたのではないかと考える。

本古墳では土器を供献した痕跡が認められなかったことから、古墳築造年代を推定することは困難であるが、勝負谷１号墳、長瀬高浜遺跡の例を援用することが許されるならば、古墳時代中期に築かれたものと考えられる。

さて、本古墳に葬られた人物についてであるが、１号墳同様、交通・軍事に多大な影響力を持った者であるとしたい。本古墳と似た様相を示す長瀬高浜遺跡も海岸部に存在していることを考えると、尚一層海上交通に影響を与えた人物と考えられる。想像たくましゅうすることを許されるならば、本古墳に葬られた人物は鳥取県の海岸部と何らかの交渉を持つ者であったとしたい。

3、3　号　墳

a、墳　　丘

2号墳の北側に隣接するもので、北側斜面は茶畑として利用され、元の地形は損なわれているが、東西8.4 m、南北6.8 m、高さ0.5 mの規模を有する方墳である。墳丘は地山を切削加工して、墳頂部のほぼ中心に墓坑を穿つものである。墳丘の南側には前述したように2号墳と共有する形で幅2.6 mの溝を有する。葺石は墳丘南側で比較的整然と残っているが他の斜面では元の位置から転落している。

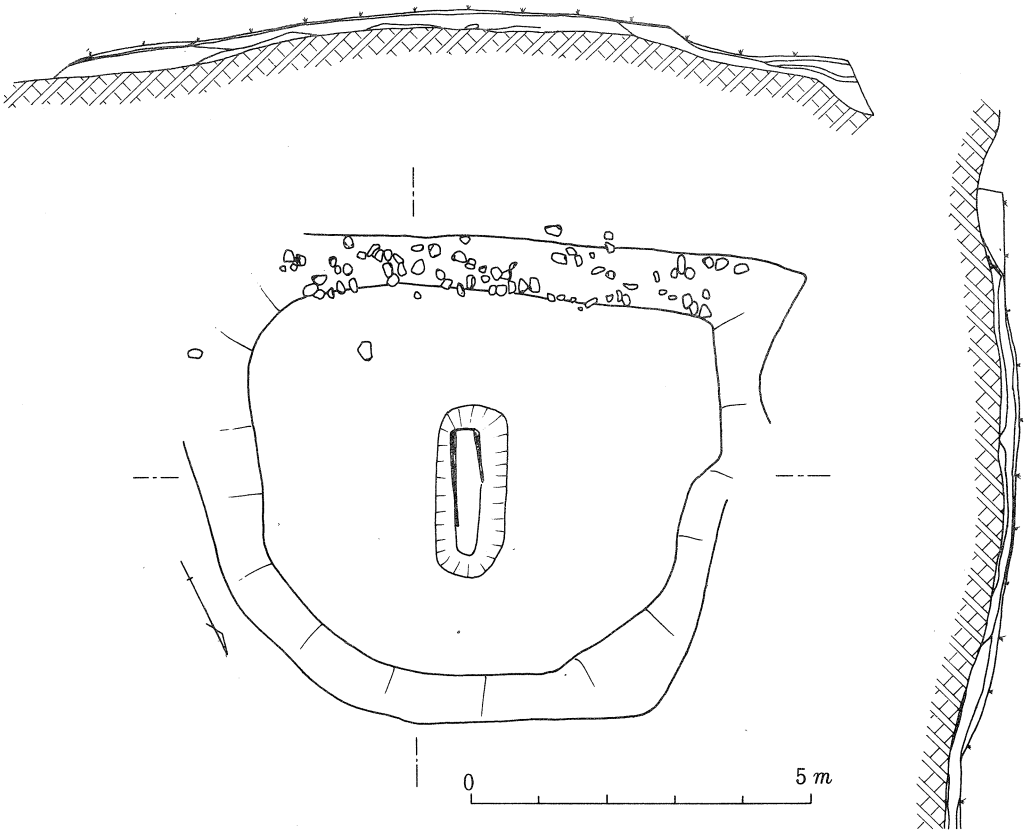


図15　3号墳墳丘実測図

b、主　体　部

墳頂のほぼ中心に長さ2.5 *m*、幅1.2 *m*、深さ0.4 5 *m*の南北に長い墓坑を穿っている。墓坑上面は赤色粘土で覆われたもので、墓坑内を掘り下げたら、木棺を安置した痕跡が検出された。木棺は、両側板と蓋のみ検出された。側板は、厚さ5～10 *cm*の木材を28～32 *cm*の間隔で並べたものである。蓋は面的にとらえることができなかったが、墓坑の縦断面と横断面に痕跡が認められた。厚さ2.5～7 *cm*、幅約50 *cm*の板材を用いたものである。遺体の両側面と上部の蓋のみ検出されたことから、木棺というより、遺体のまわりに板材を置き、直接遺体に土がかかるのを防いだものと考えられる。

棺内頭部（南側）では赤色顔料も検出された。遺体の保存材料として用いたのであろう。

c、ま　と　め

地山を切削加工して築いた一辺約8.4 *m*の方墳で、墳丘裾には葺石を有し、墳頂部に墓坑を有することは前述したとおりである。表土中から須恵器を検出しているが、後世の耕作等で地形が変化していることを考えると、本古墳に伴なうものとしにくい。明らかに供献されたと考えられる遺物が検出されなかったことから、本古墳の築造年代を推定することは困難であるが、墳丘の規模、形式から古墳時代中期に築かれたものと考えられる。埋葬された人物について推定することは不可能であるが、2号墳との間に共有する形で溝が掘られていることから、2号墳に葬られた人物と何らかの関連があった者とも考えられる。

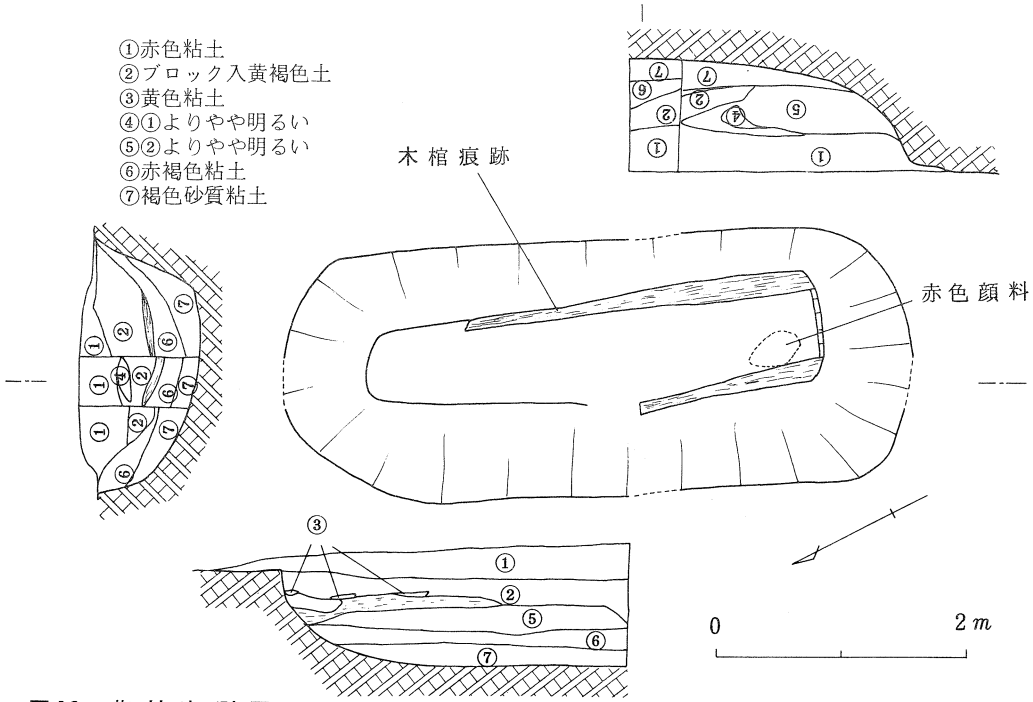


図16　墓坑実測図

4、4　号　墳

a、墳　　丘

3号墳の西側に位置するもので、3号墳より一段低い所に築造されている。墳丘の西側は崖となっているため、墳丘の裾部が若干損ねられている。しかし、本古墳全体からみた場合、墳丘全体の保存度は最も良好といえる。墳丘は盛土によるもので東西8.8 *m*、南北7.6 *m*、高さ1.4 *m*の方墳で、墳丘の北・東・南側に幅1.6 *m*～2.8 *m*、深さ0.5～1 *m*のコの字状を呈する周溝をめぐらせたものである。周構内には、土製支脚を含む多量の土器片が集中した土器だまり（図19）が検出された。

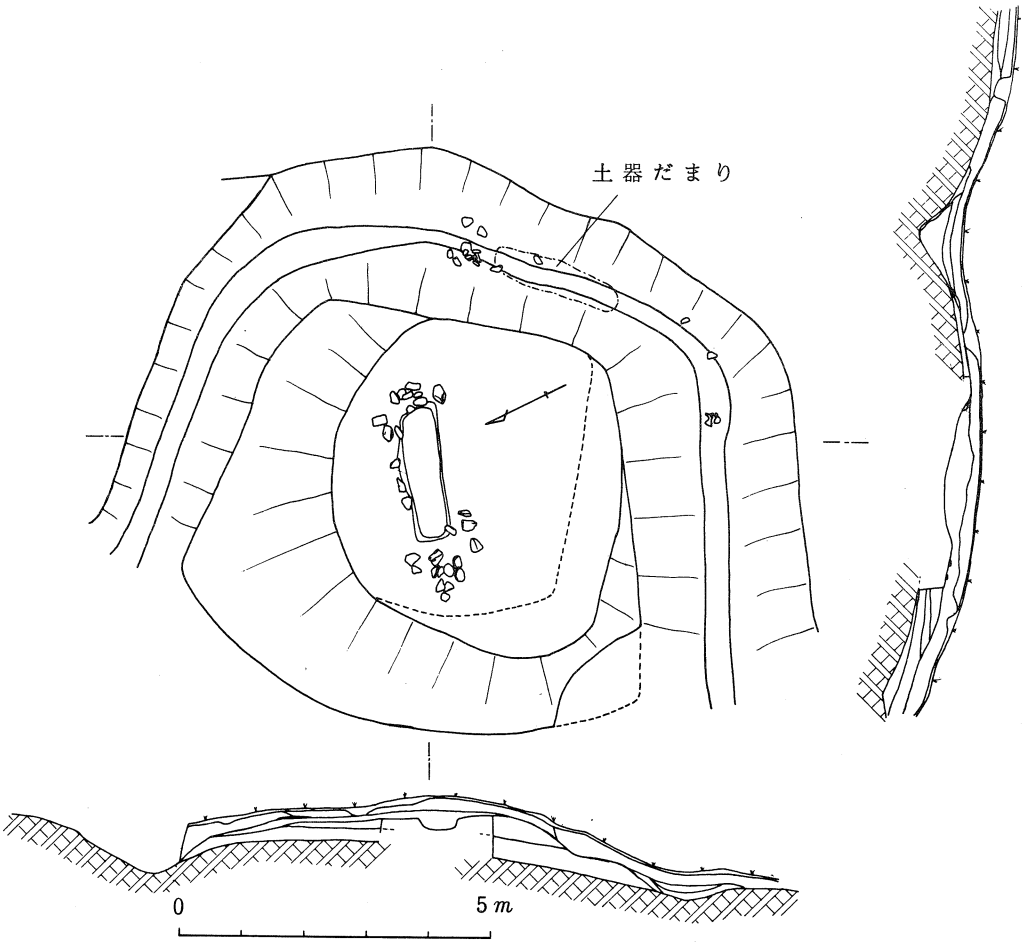


図17　4号墳墳丘実測図

b、主　体　部

墳頂部のやや北寄りの位置で、長さ2.15*m*、幅0.6*m*、深さ0.15*m*の東西に長い墓坑が検出された。墓坑の周囲には、人頭大の河原石を配置している。木棺等の置かれた痕跡は認められなかったが、おそらく、墓坑上部に板を置いたものと考えられる。

c、土器だまり

墳丘東側の周溝内で土器だまりが検出された。土器だまりは、土製支脚、土師器甕片、須恵器坏片、河原石で構成されている。土製支脚は横転した状態の完形品と破片、土師器甕、須恵器坏は全て細片である。いずれも炊さんのための火を受けた痕跡もなく、周溝にも火を焚いた痕跡が認められなかった。

土製支脚は3本の角を有するタイプのものである。底部が凹むもの（図20－7・8）と平底を有するものがある。平底のものは、底部に若干の布目がみえる。

土師器甕は、推定口径19*cm*～23*cm*のもので、口縁部の内外面は横なで仕上げ、胴部外面は刷毛仕上げ、内面はヘラ削りで仕上げられている。

須恵器坏は、山陰の須恵器Ⅳ期[註⑨]のものである。

なお、主体部から針状の鉄製品1を検出したが、取り上げの際紛失した。

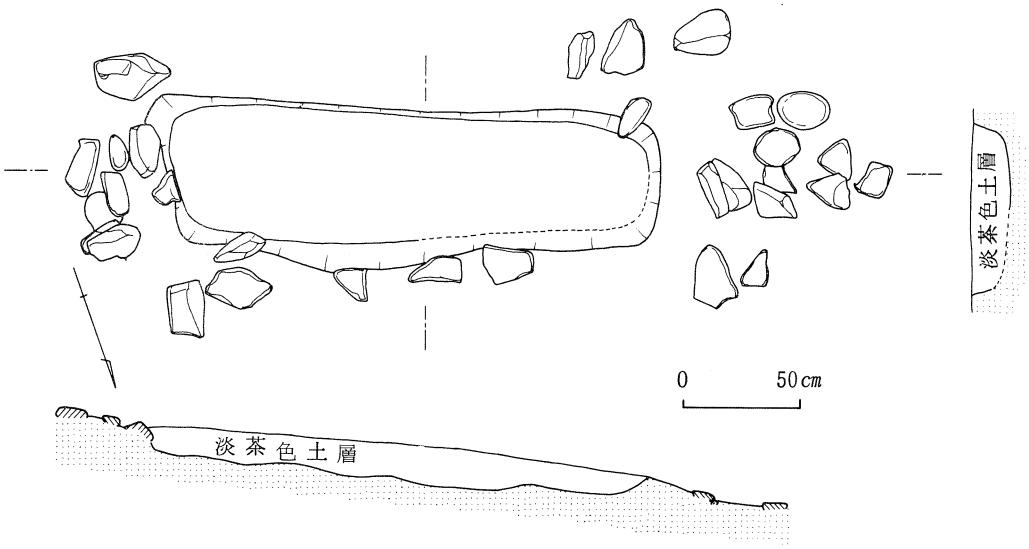


図18　墓坑実測図

d、ま　と　め

前述のように、墳丘は盛土によるもので、8.8 m×7.6 mの方墳であり、コの字状の周溝を有し、墳頂部に墓坑を穿っている。出土遺物から古墳時代後期後半に築かれたものと言えよう。墓坑内から針状の鉄製品を検出したが、これは現代でも葬儀の際、遺体の上に刃物を置き、魔除けにすることを連想させて興味深い。本古墳で特徴的なことは、周溝内より土器だまりが検出されたことである。特に土製支脚が含まれていることが注目される。当地方では、横穴から土製支脚が出土した例は若干知られているが、石室をもたない古墳の周溝内から土製支脚を含む土器だまりが検出された例は他にない。前述したように、これらの出土遺物は二次的な火を受けた痕跡もなく、周溝内には木炭片も検出されなかった。これらの事実は、葬儀に伴なって行なわれる墓前炊さん[註⑩]の形式化したものであろうと判断される。

図 19　周溝内土器だまり実測図

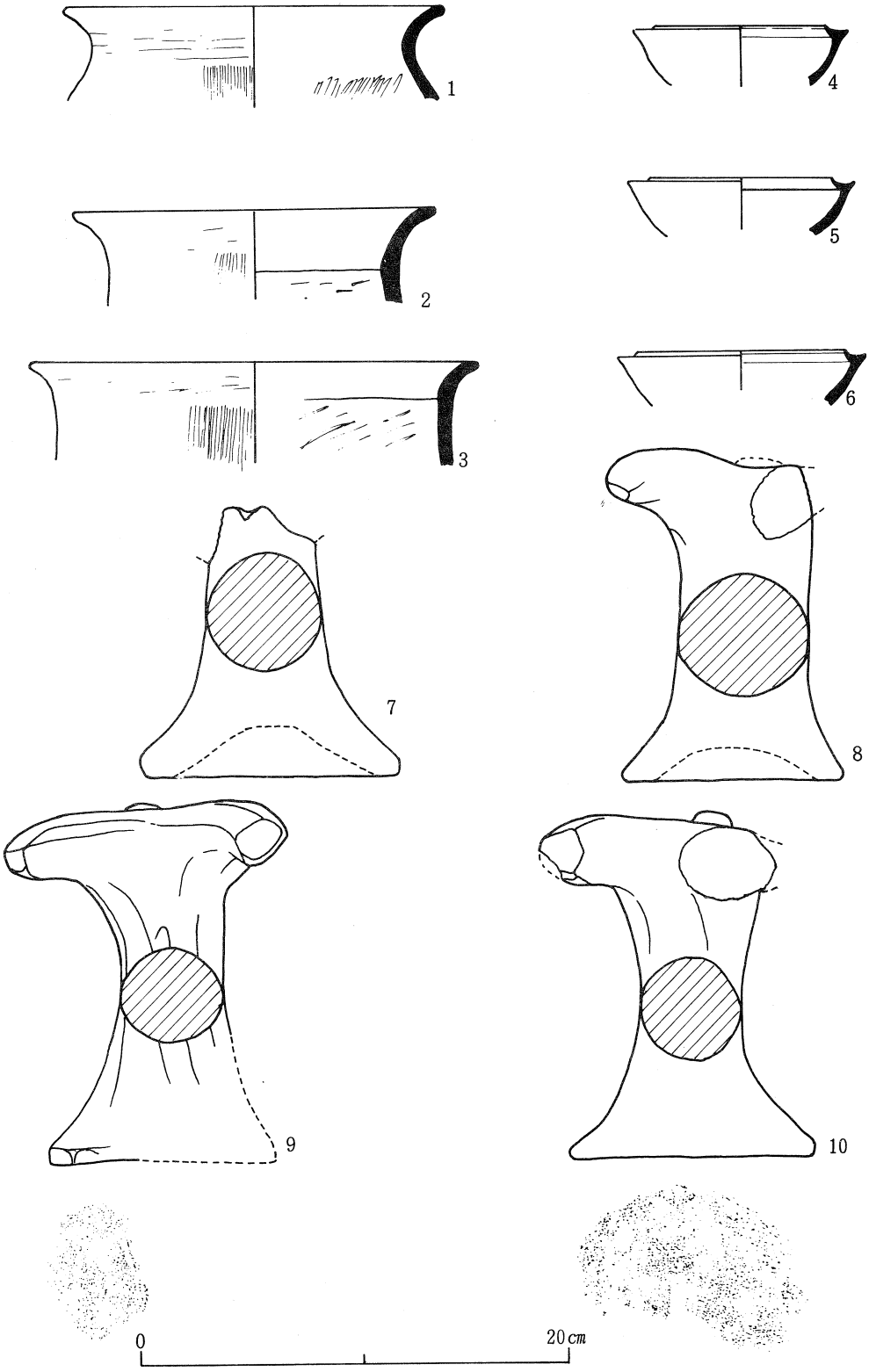


図20　出土遺物実測図

5、5　号　墳

a、周溝及び主体部

3号墳と1号墳の中間に存在し、一辺9 *m*の方墳と考えられる。墳丘そのものは、茶畑として利用されたため既に消滅している。かろうじて幅1～1.3 *m*、長さ11.2 *m*の溝が残され、墳丘中央部からやや北に寄った部分で土器棺が検出された程度である。土器棺は既に割れて元の形を失なっていた。棺を安置したと考えられる落ち込みもみられたが、耕作のためこれも元の形を失っている。

b、出土遺物

土師器甕（図22－1）

口径22.3 *cm*、胴部最大径40 *cm*、推定器高51 *cm*のものである。複合口縁を有し、底部は若干の平底を有する。口縁部は内外面とも横なで、胴部は内外面とも刷毛により仕上げられ、胎土には微砂粒を含む。器形からみると、安来市八幡山古墳[註⑪]出土のものに近い。

刀残欠（図22－2）

表土中より出土したもので、遺構に伴なったものではない。残存する部分は、中子を含んで22.8 *cm*の長さである。鉄製直刀で、刃部の断面は細長い三角形を呈する。

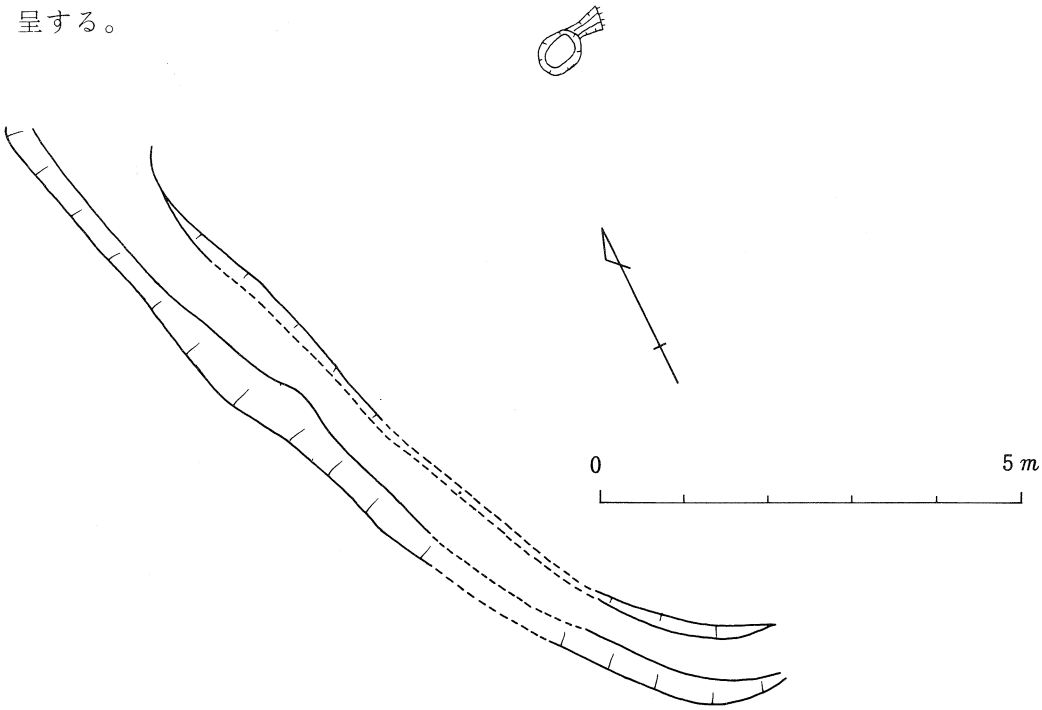


図21　5号墳溝実測図

c、ま　と　め

本古墳は一辺9 *m*の方墳と考えられるが、既に墳丘は消滅しているため詳しいことは不明である。出土した土器棺から、古墳時代前期のものと考えられる。墳丘全体の様相や主体部が判然としないため、本古墳に葬られた人物について推定することは不可能であるが、1号墳同様に交通・軍事に多大な影響を与えた人物かと考えられる。また埋葬様式、土器棺の形式から前述の安来市八幡山古墳と密接な関係をもつ者であったとも考えられる。八幡山古墳の場合も比較的中海を見わたすことのできる小高い丘の上に築かれている点が興味深い。

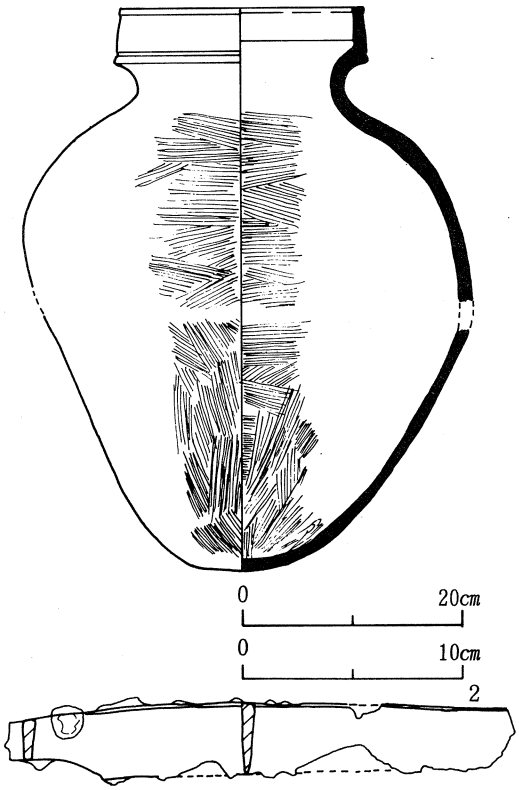


図22　出土遺物実測図

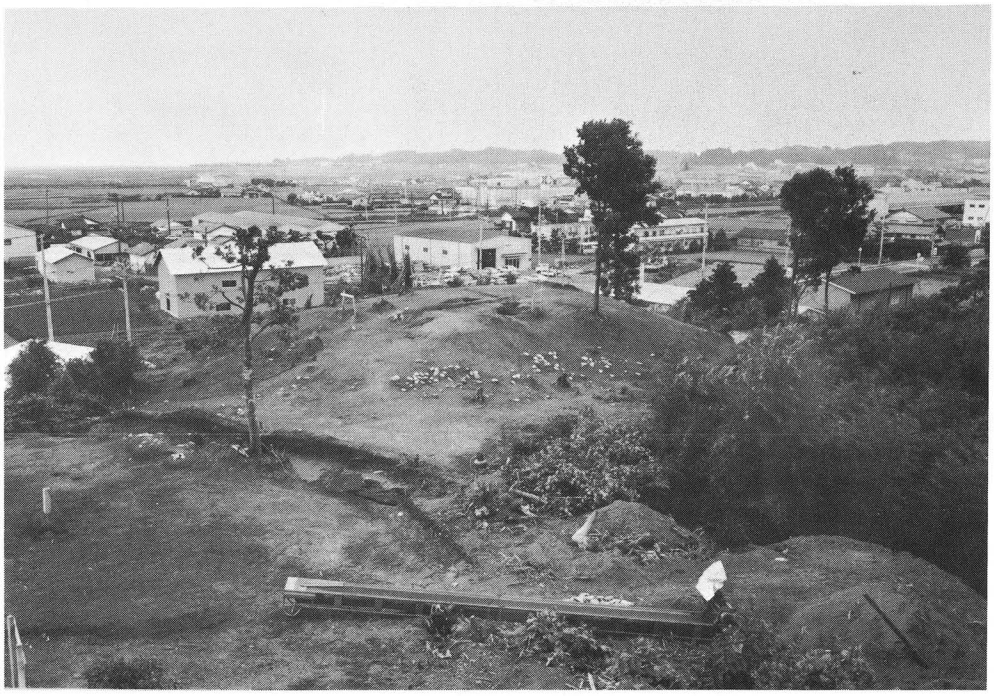
Ⅳ　お　わ　り　に

本古墳群は、これまでたびたびふれてきたように、中海沿岸の低丘陵上に築かれ、5基の方墳で構成されるものである。このような三方に眺望がきき、付近一帯の看視に都合のよい場所に墳丘を築かせた人物の当地方における権力の大きさを私たちにみせつけている。この地に古墳時代前期から後期に至る長い間、古墳がつぎつぎと築かれてきたことを考えると、一層周囲に対する看視あるいは威厳をほこるに都合のよい場所であったと考えられる。

また古墳を築く場所として選ばれたのみでなく、古墳発生以前、即ち、縄文時代から弥生時代にかけて生活の場所としても格好の地であったことが、古墳盛土中の遺物からうかがえる。さらに古墳が築かれなくなってからも、墓地として利用されたり、近世になってから荒神が祀られていた事実は、人の土地利用といった面から考えても興味深いことである。

註①　近藤正・前島己基「島根県松江市的場土坑墓」（考古学雑誌第57巻第4号）
②　昭和44年に当時島根大学文理学部教授であった山本清先生の手により発掘調査が行なわれている。
③　島根県教委「八雲立つ風土記丘周辺の文化財」
④　島根県教委「八雲立つ風土記丘周辺の文化財」
⑤　検出された土器はいくらかのタイプに分けられるが、層位的に分かれるものではない。即ち、同一タイプのものが上部から下部に至る各部分で検出されている。
⑥　石材は「輝石・角閃石安山岩」であるが、当地方における産出場所は明らかにされていない。（島根大学理学部助教授、理学博士飯泉滋先生の御教示による）
⑦　鳥取県教委文化課森田氏の御教示による。
⑧　島根県八束郡八雲村教委「勝負谷1号墳発掘調査報告書」
⑨　山本清「山陰古墳文化の研究」
⑩　小林行雄「黄泉戸喫」（考古学集刊第2冊）
⑪　山本清「山陰古墳文化の研究）

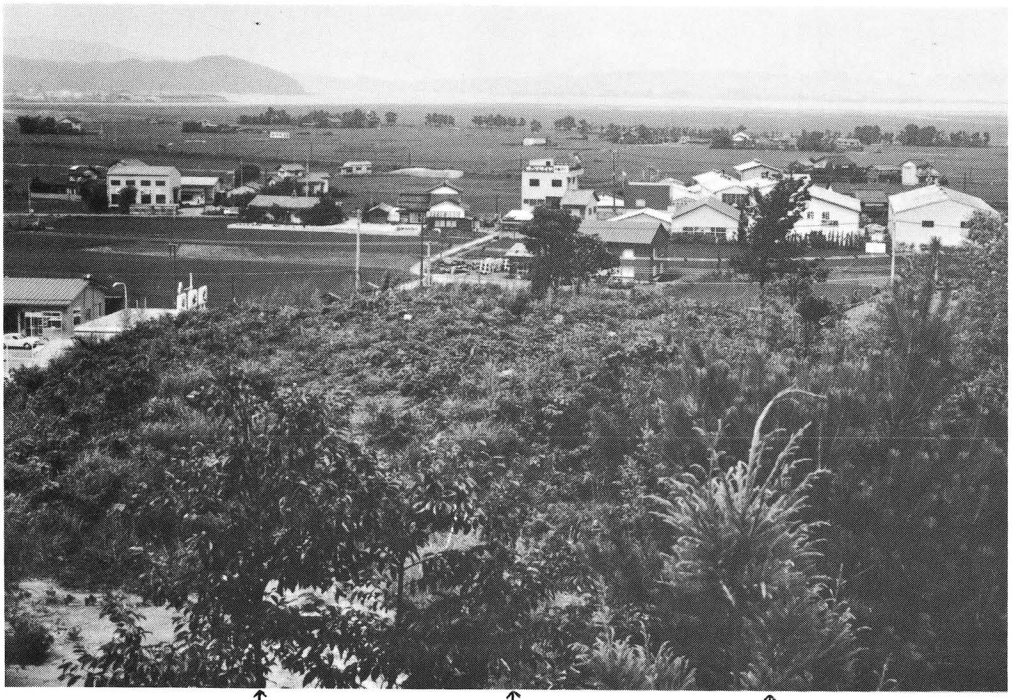
図版２　１号墳発掘前遠景（西側より）



図版３　１号墳発掘後遠景（西側より）

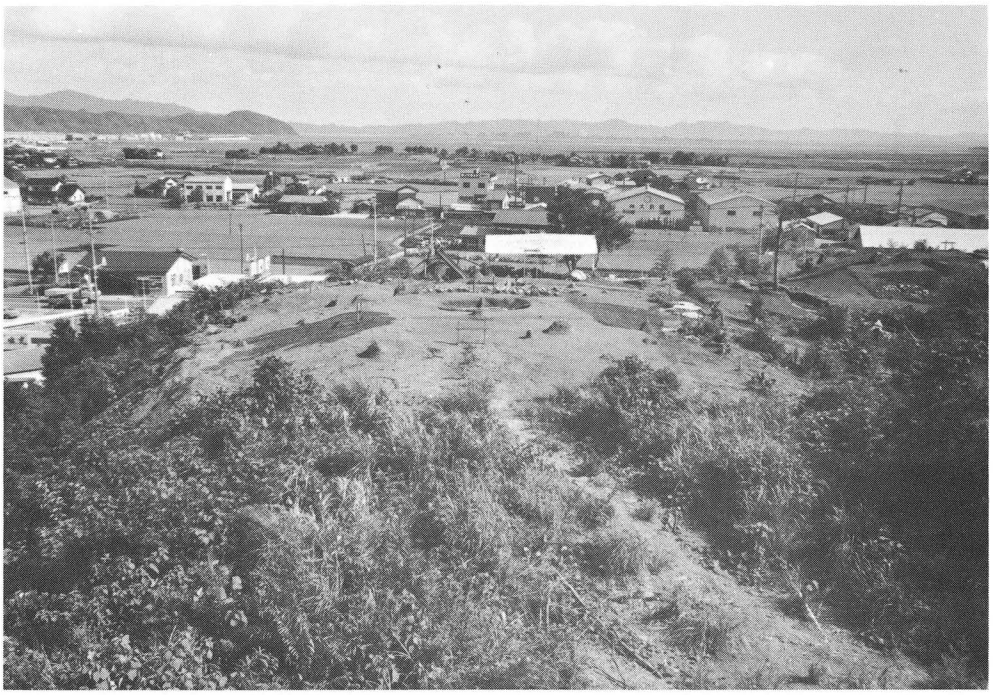
図版４　１号墳１号土坑遺物出土状況

図版５　１号墳１号土坑

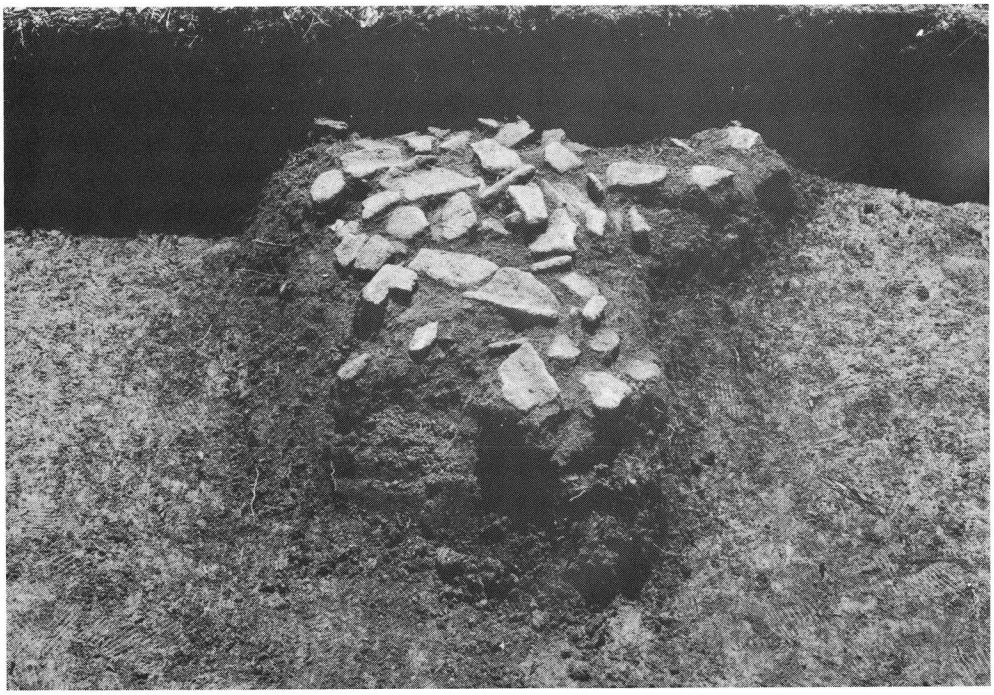


↑４号墳　↑２、３号墳　↑５号墳

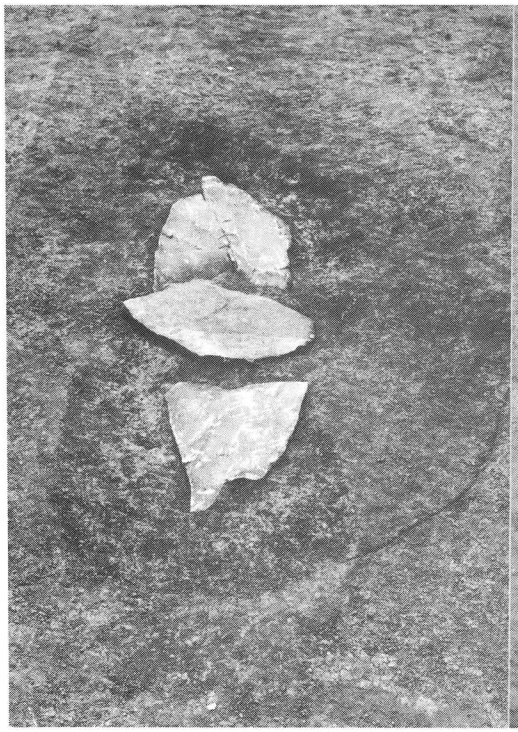
図版６　２、３、４、５号墳発掘前遠景（南側より）



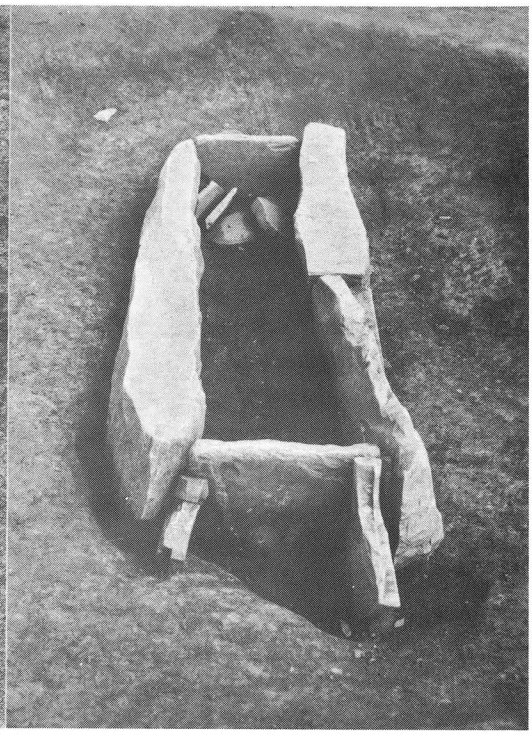
図版７　２号墳発掘後遠景（南側より）



図版８　２号墳・埴輪片出土状況



図版９　２号古墳石棺蓋（西側より）



図版１０　２号墳石棺（西側より）

図版１１　２号墳石棺（南側より）

図版 12　3号墳（南東より）

図版 13　3号墳墓坑（北側より）

図版 14　4号墳（北側より）

図版 15　4号墳周講内土器だまり

図版 16　4号墳周溝内

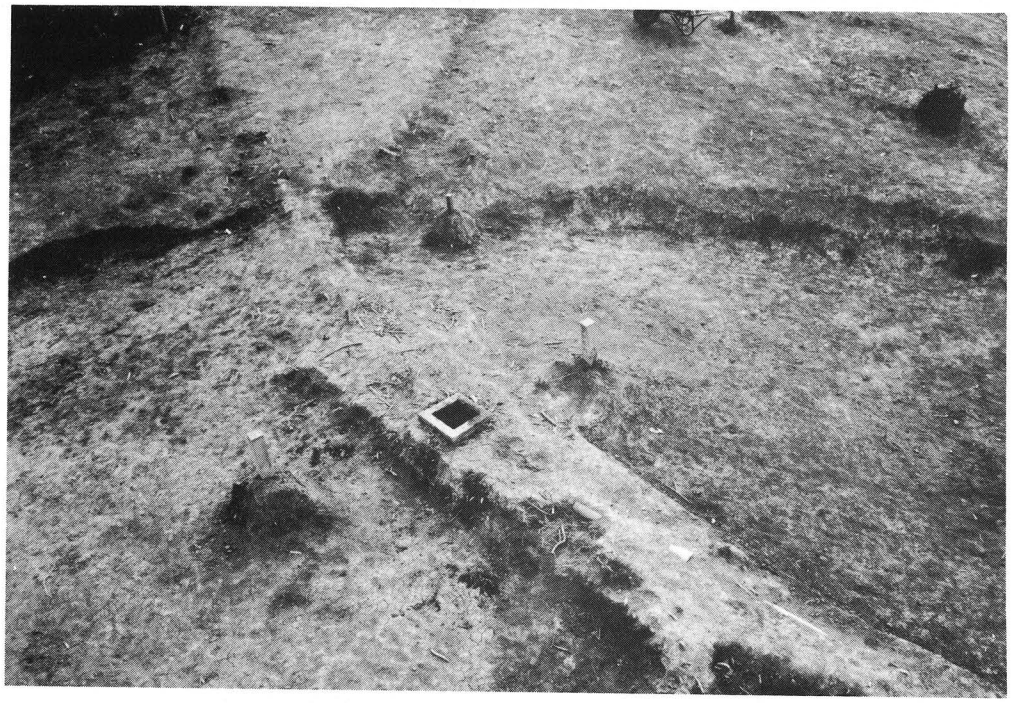
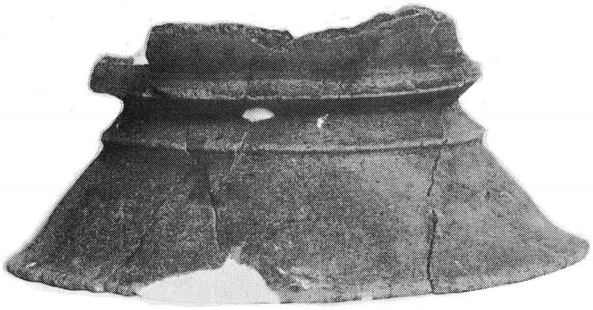
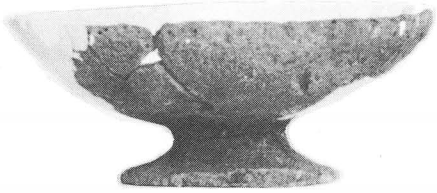


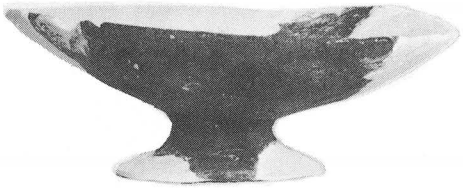
図 版 17　5号墳周溝（北側より）



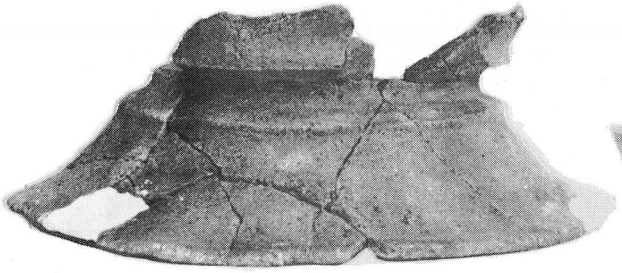
(8 −13)



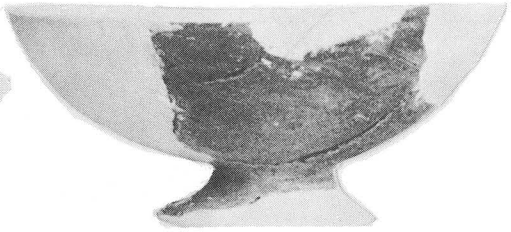
(9 −10)



(9 −12)



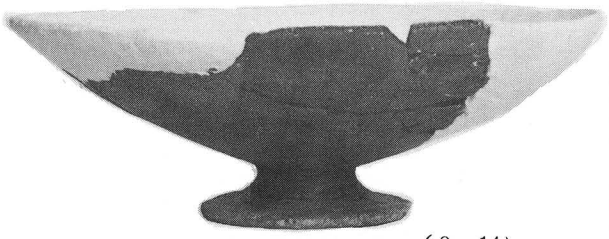
(9 − 8)



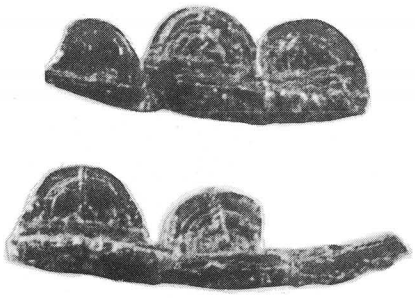
(9 −16)

図版 18　1 号土坑出土土師器

(9 −18)



(9 −14)



図版 19　三 連 櫛

図版20　土　製　支　脚

図版21　直　刀　残　欠

大木権現山古墳群

昭和５４年３月発行

編集・発行　東出雲町教育委員会
八束郡東出雲町揖屋1142

印　　刷　松　陽　印　刷　所
松江市殿町384